

びに清郷工作。昭和十八年四月宣興県宣興付近の警備。九月三十日、十月三十一日、広徳作戦（安徽省南部蕪湖東南方）に参加（第六十一師団Ⅱ鶏部隊基幹）す。

以後、宣興県張諸鎮付近警備。漂陽県漂陽付近警備。

七月二十三日浙閩沿岸作戦には後藤学大隊以下約八〇〇名出動、残置隊は第二、第三、第四中隊を基幹とし西山大尉留守隊長となり漂陽付近を警備す。

昭和二十年二月、後藤少佐以下の大隊主力は独立歩兵第二四〇大隊となり、残置隊が新たに第四十七大隊を編成し前任務を継続し、宣興において同地付近の警備に任ず。

復員完結、昭和二十一年三月二十四日（復員時の人員一、一二〇名）

## 私の青春と参戦の実状

### ― 生還後の感想について ―

山形県 滝田吉郎

先代父・忠四郎の長男として当地に出生、西郷尋常高等小学校を卒業し父の家業を継ぐ。

当時青年学校において厳しい軍事教練を受け、また、日中戦争も熾烈極まる昭和十五年七月五日、臨時召集を受け、山形歩兵第三百三十二連隊・第五中隊第四班に編入。一期検閲までは擲弾筒班にて猛訓練に励んだ。

やがて十一月となり、戦地さながらの師団秋季大演習に参加した。実戦同様の大規模な演習も無事終了、一段落と同時に海外派遣の噂も耳にされ、同時に、新品の完全軍装の品々がすべて整った矢先、陸支機密により外地派遣が急変し、意外にも召集解除の命令が出た。しかし隊長より「これは一時的で、健康に注意しての待機である」との訓示を受け、一旦、帰郷解除と

なる。

その後月日がたつにつれ南方の戦況の悪化が懸念される中、昭和十六年の出征兵は正規の軍装も出来ず、日常のまま誰一人として見送人もなく、家族だけに別れを告げ、人目を忍び、征途につく事態となった。

何故か判断に苦しむ戦況の中で待機中、太平洋戦争が勃発し、やがて待ちに待った再度の召集を受け、山形歩兵第三百二十二連隊第一中隊に入隊した。嘗外、清水屋旅館に宿泊。

約一カ月の教練の末、忘れられない私の誕生日の五月十日、夜十時山形出発、行先不明のまま乗車、十二日夜半、暗闇の中、宇品港より出航、行先を船中で想像しながら朝になって上陸した所は釜山であった。

さらに朝鮮半島を鐵路縦断、鮮満国境を通過し、満支国境の山海関通過、大原に到着した。食糧を受け再び乗車、途中列車は攻撃を受けたが無事到着したのは臨汾。ここで全員下車、直ちに当地区の警備となった。

大隊本部は臨汾とのことで、各中隊は命により各警備地区へ移動、直ちに配備、警備態勢をとる。我が第

一中隊は万安鎮を中隊本部とし、さらに私は丸岡曹長を長とする十五名の一員として天壇里分哨勤務となり、当地の警備態勢に入った。

警備は昼夜の別なく、異国に来て初めての体験で身の引き締る思いでの歩哨である。絶対油断するな、いかなる細かい事、不審に感じた事、必ず申し送りするようにと毎日強い訓示が与えられ、緊張の連続であった。

この緊張の勤務一カ月にして、俄かに私一人だけ至急下山すべしとの命にて原隊へ戻って見ると、中隊から二名無線修業のため、洪同の旅団の通信隊へ転属であった。しかも二ツ星へ進級と同時の転属、嬉しさと心配の交差する気持ちで申告の上、洪同へと行く。

ここでは各中隊の選出者に負けまいと一心不乱、誠心誠意尽力し、三カ月の末、教育は無事終了し原隊へ復帰、無線通信手として先輩とともに通信班勤務となる。

二週間後、今度は再び私一人が大隊本部無線通信手として本部通信班勤務として転属となった。

一時は私だけが再三転属されることに憤慨の気持ちも起ったこともあったが、「軍隊は上官の命は天皇の命令と心得へよ」とあり、絶対服従の命にもとづき、身も心も引き締め心を直し、北支那方面軍第六十九師団・勝五二三〇部隊・独立歩兵第二百大隊・第一中隊所属大隊本部通信班の勤務に精励する。

やがて、年の瀬も明日という暮の十二月三十日の夕刻、江口少尉以下、二十七名の石家莊分哨が、交信途絶と共に、銃声が遠く聞こえ、副官及び情報部暗号班等へ緊急通報する。

直ちに確認のため非常呼集により緊急出動したが、敵は逃亡の後で全員戦死。しかも人名の顔すら判明し難き悲惨な形となっていたことが確認され、帰隊と同時にその悲報に接した時のショックは忘れられない。

異国に来て「戦死」との言葉も初めて、しかも隣村の高橋力君も含まれていることで、故郷を出る時、同じ駅にて誓い合った仲であったことから、驚きと悲しみで非常に残念であった。これは戦地にいることを初めて痛切に身を以て体験することとなった。

通信兵の任務は作戦経過の全期間を通して、指揮連絡を万全ならしめるものであり、「軍隊の神経といわれる責任重大なる任務であることを常に肝に命じて精励すべし」と訓示の基本にある。また、送受信と暗号からなり、一心一体の行動にて成立する機密的存在にて、敏速行動が要求される。班員相互の理解と意志の疎通を計ると共に協力がかせない。

本部勤務も落着きを取り戻した春、四月、本部通信班として「十八春大行作戦」に参加することとなり、新郷付近より大行山中心部に向い作戦開始する。東姚集に拠る中央軍一個師団を独混第三旅団（造）と共同で攻撃し、主力を壊滅する作戦であった。約一ヵ月間、山岳戦の毎日、四〇キロの強行軍の上での交戦など、数々の戦闘であった。

その際、台上より不意の銃撃で右足踵内側擦過傷を負ったが、靴の中は汗のぬめりであるものと思ひ、わからず進撃、数時間後、交信と休息に際して靴を脱いで見て、血はやや止まっていたが、靴下が真赤になっていたことに驚いた。

これを同僚に見えされ、すぐ手当をといわれ、衛生兵の消毒と手当を受けたのは夜半であった。なかなか眠れないまま夜が明けた。しかし今日も行軍と通信が続く。戦友達には「大丈夫か」「オイ、背囊持ってやるよ」と交互に励まされた。戦友達に厄介になるすまない気持ちと苦痛に耐えて、気力で大丈夫と言ったものの四、五日位のつらかったことは終生忘れられない。

しかし武運ありて軽傷でよかったですと胸をなでおろし、戦友達に助けられながら作戦も終了し原隊へ復帰したが、この喜びも束の間、まもなく行軍中の飲料水が原因で下痢が発生、熱が伴い、急性大腸炎と診断された十数名と臨汾陸軍病院へ入院を余儀なくされた。負傷して入院もせず頑張り通して来て、こんな事で入院とは実に情けなく残念であった。しかし僅か二週間で全員退院した。

私は足も体調も回復し再び原隊に復帰、感謝しながら通信一筋に専念する。その後、一週間前後の討伐には数回加わることがあった。

やがて半年が過ぎ、第二百十大隊は、垣曲県王茅鎮へ移動、王茅鎮を本部とし垣曲付近の警備の任に着き、私は本部勤務となる。まもなく稷王山周辺地区作戦に参加することになった。

下王尹の部落は周圀が土塀に遮られ、城壁内より頑強に抵抗する山西軍に対し、白昼、熾烈極まる銃砲火を冒しての突撃を敢行し殲滅的打撃を与え、最大の戦果を挙げた。

しかし部落は城壁と土塀に囲まれて城内の至る所に銃眼があり、また外廻りは、交通壕を掘りめぐらせて頑強に構え、銃眼より豆をいるように間断なく無気味な音と共に銃撃の猛射があり、また狙撃に應戦し、ひるむこと知らず。我が方も勇猛なる攻撃を敢行するも、一面に畠で遮蔽物を利用する所がなく、将兵はこのままでは犠牲が出るだけである。

早く突撃せよ、といっているうち、数名の死傷者が出てしまった。先に砲火器、歩兵砲等の応援を連絡しているものの、狭い悪路の登りで台上へ進めず、これも遅れて思うようにならない。将兵気をもんで応戦中、

歩兵砲隊が到着した。すぐ歩兵砲の援護射撃の中を白兵戦を敢行するが、飛来する弾が身近に集中、土煙が点々と立ちこめ、かつ畑地で遮蔽物はなく、全身露出で突っ切るほかはなかった。

しかし「一緒に出るな、一人づつ出て行け」と誰かが叫ぶ。果たして自分は誰の後に出たか、何番目に出たかは記憶はない。危険は覚悟の上、無我夢中、力のある限り畑を突っ走った。激しく弾の飛び交う中で、顔に変な衝撃の予感にしたものの、その時は別に考える余地はなく、ひたすら地隙に走り込んだ。後方で誰かがやられたらしい姿が見えた。文字通りここまでは助かったと、大きいため息をついた。

一般中隊はほとんど進撃を続け、包囲に成功、戦果は甚大であった。しかし戦いすんで夕陽沈んだころ報告があつたが、二〇名近い死傷者が出た。私もその一人。私は平静を取り戻した折に、私の顔の左目頭付近から肩にかけて血痕が見えるがどうしたと問われ、気が付いて見ると左目上まぶた左端の方が少々ちぎれているのが分かった。顔をよくふいて消毒程度でまぬが

れたが、考えれば考えるほど恐ろしさを感じた。

これが三センチ内側であつたら失明か、この世から消えたに違いなかったかと考えると、全く奇跡という外はない。武運が強く、命拾ひしたことに感謝の外なかつた。約二週間の作戦で戦果も大で命もながらえたが、熾烈極まる白兵戦の白昼攻撃で気が張っていたとは言え恐怖感はいなめなかつた。

その後、昭和十九年五月八日より大規模な黄河渡河作戦のため各大隊の行動が開始された。第二百十大隊は前日、乗船要領、断崖の登る要領、ほうふく前進、船の組立持参要領等の猛訓練を行い、九日午後より遺髪・遺爪・遺書を残し、認識票を身につけ、恩賜の煙草をいただき、恩賜の酒を飯盒の蓋に汲み各戦友と別れの酒を交した。

隊長は言い残すことがある者は申し出ると言われたが、誰一人申し出る者はなく、もしもの場合頼むと元氣一杯にて夜を待つ。

やがて上陸用組立舟艇に各分隊毎に乗船、朝岡隊は左一線村川切込隊に配属、宗家山を占領すべく。柏木

部隊は右一線切込隊青山を占領すべく、本部指揮班は正面切込隊として青山を占領するという渡河作戦で、いよいよ九時二十分を期して各分隊は暗闇の中、艇を河辺まで運び出し、行動を開始した。工兵隊の指示に従い一斉に乗艇、一五名ぐらいの将兵を乗せ、エンジンには工兵隊の操作にて一斉に発進、暗闇の中、神に祈る思いと悲壮な覚悟で対岸に着くのが待ち遠しい。

やがて舟底がガリガリと音がした、ソレと一斉に飛び降りたが五〇センチ位の水中で、腰下はズブぬれとなった。予想通りそこは断崖で、どこをどう登ったやら、闇夜の中の手さぐりである。その後どう歩いたかは無我夢中、処々に溝等があり肩車で後の人に押し上げられてよじ登る。一部頂上へ達し、占領成功の信号弾が夜空を明るくしたが、敵は全く知らず、不意をつかれて応戦はなく、我々は無血で無事占領に成功した。

しかし敵は信号弾と我が軍に不意を突かれ、両側からの挟み撃ちとなつて、あわてて応戦する。このため後続部隊は敵の猛射を受けて苦戦となる。やがて月が出て状況は不利となり、後続部隊ほど損害を受ける形

となった。

私達の正面の第一線切込隊は、幹部は多くの犠牲が出るものと見ていたが、無血で上陸に成功し、占領できたことに対して、一同感泣した。隊長は百万ドルの信号弾であると喜んだ。

我が部隊は、その後は後続部隊に任せ、進撃また進撃、猛進につぐ猛進となった。本部は、汾南地区の山西軍の撃滅作戦で、岱眉山の峪嶺を越す猛烈な強行軍が始まる。一中隊と本部は分離して敵中突破し、本部一少隊の戦闘部隊は十日夜と十一日、敵と遭遇しながら繩池めざしての強行軍となった。

十二日夜から激しい雨が降る中の行軍はままならず、泥靴重く苦難の連続で、ようやく十二日夜半に到着したが、戦闘部隊が先に到着し追撃した後であった。雨降りの中の強行軍に本当に耐えた苦労は忘れられない。

翌日繩池から新安の手前南庄に到着。部隊長のいる場所へたどり着き、地兵团直轄から解かれ原隊に戻ることにした。後ほど、情報部からの報告によると、

戦果は捕虜等多大なるものがあり、その後第一軍司令官より、感状が授与されたが、正直のところ、第三回の負傷等はさげられることを祈り続けての参加で、無事生還できたことは何よりの喜びであった。その後、改めて通信関係に専念することになり、河南省班村付近の警備となる。

また、九月半ばより、汾南地区の山西軍撃滅の第五十九旅団作戦の里児間の戦闘に参加することになる。

これまでの数々の戦闘に参加する度に厭な予感があるが、作戦終了の度に安堵感で胸をなでおろした経験がだんだんこの恐怖感を薄くし、自信に繋がるが、しかし戦争は歓迎するものではない。

いよいよ編成終了、出発となる。途中深い地隙に入りなかなか困難を極めた。道路は狭く、曲がりくねり、上り下り坂の山岳路であり、銃火器は大変。足元は重い、背囊も事の外重く肩に食い込む。凹地に隠れながら小休止。何日とも知らず行軍、進撃の繰り返し、段々畑で台上に上がった瞬間、豆を煎るような銃声。隊長は、段々畑でよく見えないが、部落があり城壁が見

える。また銃眼の所もあるようだとのこと。

まもなく誰かがヤラレタとぞわめいた。小銃隊は少しづつ前進して一步も退かない。一斉に左右から重機、中央より擲弾筒を撃つ。「弾薬遅れるな」の必死の掛け声、敵はまだまだ撃つて来る。プスプスと足元に土煙が上る。気をつける、がんばれと互いに声をかけ合い、突撃となる。

小隊長は皆んな無事かと突き進む。敵は城壁に沿って逃げ出した。「今だそこを撃て」と声を大にして言う。真正面にはまだ弾が飛んで来る。「准尉がヤラレタ」、次に「布施隊長もヤラレタ」と悲壮な声がある中で、指揮班通信班の脇にいた間野部隊隊長当番佐藤与一郎氏も部隊長をかばうような姿で戦死した。目前で戦死する者、その他十数名の将兵が犠牲となる。白兵戦の中ではあるが見捨てて行く訳に行かない。すかさず抱きかかえてみたが返事はない。残念「衛生兵呼びべ」「衛生兵前」の伝令。悲痛な呼び声。「衛生兵まだか」と部隊長が叫ぶが、前進部隊を指揮するために目が離せない。「後、頼むぞ」と言い残し指揮班と共に前進、

前進。歩兵砲隊も次々と前進、突撃、城内に入る。

城内はひっそりと静まり、各部隊は里見閻城内に四方より続々と入る。今後の命令を打電。真に悲惨そのものであった。

約二週間であったが無事生還できた喜びと感動、散華した戦友を偲び、冥福を祈りながら再び特技に専念する。我々は歩兵とはいってもほかに通信機材を携行し、行軍その他においても疲労し、神経を使い、責任も重大とあって心身共に休めることはなかった。

しかし戦場での心理は不思議というほかはない。長い行軍、激しい突撃等でアゴを出しきってヘトヘトになっただけでも、前方から銃声が聞こえるとまるで別人のごとく、足取りもしっかりし、さらに敵に接近するや興奮が高まり、勢いがつき、相手を見ると勢いが立つ闘犬のようになる。さらに近づき攻撃前進になると無言にて、前進している時は酩酊状態のごとく、行軍の苦痛から解放状態にされていることになる。

しかも蜿蜒と際限のない強行軍で疲れ切った時、少々この辺で一発始まらないか等と口にする者もある。

誰も望むものはないが、それほど、行軍はつらくなる。睡眠や食事もまばらで不規則で、しかも疲れ切っている中で戦闘が始まると、誰か何人かの犠牲が出る。悲劇的なこのような状態の繰り返しは何のためか、誰のためか、判断に苦しむことが多々あった。

やがて昭和二十年四月、河南省繩池県班村より転進となり、鉄道沿線まで約二週間、山岳地延べ四〇〇キロ位あったと思う。この毎日の強行軍にはどこをどう出て来たか判然と思いつけないが、途中、河原で大休止していたところへ、敵機来襲し、その低空射撃を受け、あわてふためき命からがら逃げ込んだ記憶がある。

また、途中、進路右前方山腹の敵と部隊が遭遇し、本部の長森曹長が戦死したのもこの時だったと思う。近くに砲弾が落下する状況で、もしや友軍ではないかと、日章旗を振れば、ピタリと止んだ。前後挟撃された敵は、谷間を北に敗走する一幕もあり、我が重機と砲兵の一斉射撃で、処置に困る程の捕虜と、戦利品の山となる大戦果もあった。

行軍と戦闘とを交えつつ鉄道沿線に到着したが、ど



こから列車を利用したか思いつかない。しかし浦口を通過し上海近く、江蘇省宝山県劉家へ移駐し、付近の守備に任じた。やがて米軍の沖繩上陸後、さらに上海付近に敵が上陸する可能性を想定し、我が大隊は、この場合防波堤となるため、懸命に守備態勢固めをしてきた。

この最中に、思いもよらぬマラリアに患り、四〇度以上の高熱とふるえが三日ごとに繰り返されるのに悩まされつつ一ヵ月、苦勞しながら無線関係の業務に励んだ。熱のため体がダルク、身の置きどころがなく、食欲もなく参ったこともあったが、入院せず業務に専念した。これも病は氣から、氣力にあることを体験した一つである。

山西・河南と前の戦闘にて死に打ち勝つての行軍を思い出し、死ということ考える要はないと心に聞かせ、耐え抜き懸命に死守するだけの、態勢固めに専念している矢先の八月十四日夜半、劉家行で突然、長文の電報を受信したのであった。

時の陸軍大臣、阿南惟幾大将の名で、「草をかみ、

土を食っても戦え」という内容のものであったことが、暗号から知られた。

翌八月十五日正午、今度は短い電報受信。早速翻訳したところによると、天皇の重大放送があるから全員ラジオを聞けとの内容のもので、大至急幹部関係に通報した。全員騒然として集合してラジオ放送を聞いたが、カスレ声と雑音にて言葉が聞き取れず、判断もできず、みんなが頑張れと言うことだろうと語りながら引き揚げる者が大部分であった。一部の無線手暗号は残って通信所を離れず、次の電報を待つため機材にかじりつくような傍受態勢でいたところ、まもなく引き続き受信、即刻、暗号を翻訳したところによると、先のラジオ放送は敗戦に係る天皇の詔勅であったことが明らかとなった。

至急隊内全域連絡と同時に、全員茫然となり絶望と驚きを隠し切れず、一部はデマであると一時的に混乱の状況となり、また全員男泣きに涙にむせんだ。

即時、隊長の訓示があり、それによって落着き、事態を冷静に判断し、戦局好転ならず遂に終戦のやむな

きに至り、断腸の思いで矛を納めるという天皇の詔勅に従わざるを得ないことと考えられ、宝山県劉家行にて終戦を迎えることとなった。なお、前記十四日の長文電報は陸相の布告であったことと判明する。しかも阿南陸相は十四日夜半、遺書を託し自刃していること、また、電報は陸相の死後受信したものであることも判明した。

「死を以て大罪を謝し奉る、神州不滅を確信しつつ、大君の深き恵にありし身は、言い残すべき片言もなし

二十年八月十四日 阿南惟幾 一

と「遺書」には記されてあったということも、後程本部上層部と通信関係者により解明されている。これは通信部だけが分かっていたことである。

その後、一般将兵は事務係以外は身の廻りの整理と使役となり、抑留生活の身となる。

戦前、防備のため構築物や壕等施工したことが裏目に出て、今度は逆に元通り復元のための使役に毎日出ることになり、中国側の使役に明け暮れた。また、食

事も一キロ以上もある所から飯盒一人十個位づつを交代に持参し、受領しなければならず、それも三分粥のような数える程の米粒が浮いている程度。しかもその飯盒一杯が一日分であった。このように僅かな食と無防備の身となりながら復員を待った。

人を使うのと使われることは天地の違いであるが、だんだん平静になり、捕虜生活もなれ、落ち着きを取り戻し、外出も出来るようになった。ある日街を歩いていた途中、木工屋さんが木工場で働いている所に出合い、懐かしげに見ていると、声をかけてくれた。よく聞くと日本で大工か、ということであった。暫くして道具を見せてもらったが刃物はすべて先に押して使う物でなかなか使いにくい、よくあんな道具である品を造ることに感心した。その時は二〇分位で帰った。

暇を見て一週間後再度行つて見たところ、ポンユー友達になっていろいろ教えてくれと言って、一時間いた。帰りに飯まで頂き、国は違つても互いに心が解し合うと人情には国境はないことを体験した。その後、復員まで二十回ほど行つたかと思うが、互いに木工技

術の参考になったことと言葉が体得出来たことなど思  
い出の一つとなっている。その間珍しい食べ物も数多  
く頂いた。

やがて昭和二十一年二月末、ようやく夢にまで見た  
故郷へ帰れる日が訪れ、呉淞へ集結のため移動するこ  
ととなった。元鐘紡紡績工場の跡地の広場で私物検査  
が行われ、二月二十一日午後、上海港より乗船となる。  
これも畳一枚に五人位での窮屈な場所で身動きも出来  
ない有様であった。アメリカの貨物船であったように  
した。

途中、後方の船が浮遊機雷にふれて沈んだこともあ  
り、夜半隣の船で遭難した兵の救助作業に当った船も  
あって、祖国を目前にして不運な方もいることを考え  
ると、我が家に着くまでは安心出来ないと思つづく考  
えさせられた。

東支那海も上海を出発して途中二昼夜を過ぎて、よ  
うやく誰となく祖国が見えたと叫ぶ者がいるような状  
況になった。我々は船底にいるため外部は見えない。

やがて上陸、小船に乗り換えさせられて佐世保港に

上陸と同時に検疫を受け、DDTを体にふりかけられ、  
さらに消毒湯を浴び、上陸の手続きを終わり、佐世保  
駅より復員車中の人となった。

列車は這うような速度で大阪駅に到着。下車し直ち  
に召集解除となり、隊の編成を解くことになる。

解散後、自由行動となる。二月末とあって故郷は雪  
だろうと覚悟し、駅前でゴム靴を見つけたので土産と  
して買い求め再び乗車、故郷を胸に画きながら山形へ  
と車中の人となる。やがて二昼夜にて山形県入りとな  
り、その後二時間半で山形駅を通過、征途の時のこと  
を偲びながら、我が部落の裏山を車中より見た。

間もなく変らない懐かしい楯岡駅頭に到着。感無量。  
生死を共にした七名が下車したのが昭和二十一年二月  
二十七日午前十一時半であった。

駅頭にて堅い握手を交し、これからもお互い頑張ろ  
う。また会うと言って足取りも軽く我が家へ急いだ。  
雪は少々降っていた。道路は五〇センチも積もってい  
たろう。駅より二キロ、強行軍を思い出し歩くこと約  
四〇分、ようやく我が家の戸に手がかかり「只今帰っ

たよ」と顔をだすと、丁度昼食中であつたが、皆茫然とし、信じられぬ顔をしていた。

「俺だ、吉郎だよ」と言つて荷物を降ろし、初めて無事生還出来た実感が湧いた。皆さんが手を休め、早速、食事準備に忙しく動く母の姿、父の姿。第一印象は父母の頭の白髪であつた。これを見ると留守中苦労と心配を掛けたなあと心で泣けた。早速仏壇に無事帰宅出来た報告を告げ、さらに近くの村社へ雪道を踏みしめながら無事生還出来た御礼と感謝の気持ちで参拝した。

駅頭に着いた時の感動、家に到着して家族の顔を漸くにして見た時の感動、神仏に手を合わせた時の感激と感動の連続、ようやく家族と共に暫くぶりの昼食、話はずみ食事が進まず、時間がかかりながらの食事をすまし、落着きを取り戻した。

月日が経つにつれ、家族親戚等の方々から、丸四年余月の軍隊生活の記録を問われ、何日かは一文にまとめて見ようと志した。しかし仕事、仕事で毎日が追わ

れたこともあつて、我々の手ではなかなかまとめ難く思案にくれていた。この文は、そのような中で私も書くことが好きであり、忘れぬようにと暇を見て書き終わつたいくつかの資料を参考にまとめたものです。不明点は手紙、電話等で補充しました。

年と共に四十五年以上も過ぎ去つた今日、大陸に四年余月生命をさらしての青春を想い浮かべながら、これらの体験を書くことは、老兵にとつて、なかなか大変なことである。

私は筆不精だが書くことが好きで、今以て六〇冊の日記がある。中でも戦中、大陸での行動を日記的に書いたものは復員の際の私物検査で持ち帰ることが出来ず、涙をのんで焼却のやむをえないこととなつたが、今考えると持つてこられたかとも考え、本当に残念でない。

何と言つても御国のためとはいへ、当時名譽の戦死と言つた美言の下で数多くの戦友が勝利を信じながら目のあたり死んでいく姿や、血を血で洗う殺し合いの苛酷な愚かさを、身を以て体験した。一人の命が犠牲

になつて何が名誉で何が国のためかと考える時、まず思うことはすべてが空虚でしかない。とくに親の心境を考える、祖国のためになつて良かったと申す方もあつただろうことを考えると、気の毒であり、また途方にくれ生活をおびやかされた方々も大勢あつたろうことを考えると、ただただ残念でならなかつた。健在で帰つたのが申し訳ないということが第一印象であつた。

当時の軍隊生活を想えば、現在の青年は幸福です。衣食住充ちての飽食時代、このような経済大国日本になつたのも、我々先輩等、身命を捧げられた勇士の方々と、戦後耐え忍んで復興に努めた一人一人のたゆまぬ努力であつたと言つても過言ではない。国民は、寒さと飢えに耐へ、ひたすら国のため家族のためと頑張り抜いて働き続けた賜である。耐え忍ぶ心、敗戦のどん底より立ちあがる精神は軍隊生活での経験と勉強で鍛えた収穫であつたに違いない。たとえ誤つた戦争であつたとはいえ、青春のエネルギーを注いだ軍隊生活四年余の体験は、忍耐精神、団結力の精神修養の道場

であつたといえよう。

また、敗戦より国民は新たな決意を以て立ち上がり、今日の平和を築いたことは喜ばしいが、その平和の礎として平和を夢見ながら散つていった勇士を偲ばずにはいられない。また散華した勇士のためにも、血で血を洗う悲惨な戦争は、一度とやるべきではないことを、語り継ぐ責務があると考える老兵の一人である。これは、我々はこの最高の人生体験の宝を生かし、無事生還出来たことの幸運に感謝し、敗戦の惨さも今や歴史の彼方へ風化しようとしている時、事実を経験した私達が語り伝えるべき責任を痛感しながら書き綴つた文である。

また、語り継ぐべきこれからの人々に一字なりとも参考になればと、願いを込めて書いたが、何と申しても青春の若者が勝利を信じて物故された英霊に対しては敬意と冥福を祈るのみであります。

戦中の軍国主義は、天皇のため、国のためという恐ろしい思想と絶対服従主義で、自由を完全に束縛された時代で、この「時の流れ」には勝てず、どうにもな

らなかつた。戦後は自由と民主主義に大きく変わり、言論は自由であり、今後は武力に頼らず信頼と協力、双方で納得の行くまで語り合いながら、相手を直ちに敵とせず、素直に語り合えば、接点が生れるのではなからうか。

戦争は何と言っても血を血で洗い、双方に甚大な損失を生むことになり、断じて二度とあつてはならないと強調するものである。言うに及ばず口先だけでは守れない。銃口の先に立ち、身命尊重を第一に考えるべきで、他人が銃を持っているから私も万が一の場合の身を守るため自分も持つ、互いに相手以上の装備を確保するといった考えで相手をおびやかす。このようないたちごつこの悪循環を断ち切らなければ、世界の平和はあり得ないと、互いに肝に命じて考え直すべきと重ねて申し上げたい。

祖国の平和を願いながら悲壮と言うべき戦闘を繰り返し、緒戦の華やかな勝利に拘らず、敗戦を迎えねばならなかつた私達の心中は、筆舌に尽くし難いものがあった。

しかしこの無念さは新たな日本建設となつて我が国は驚くべき発展を遂げた。この今日の平和と繁栄は先の大戦に散つた幾百万の方々の犠牲の上に立っていることを忘れず、広大な中国大陸の山河に青春を賭けて戦つた一人として、私自身心の奥にも刻まれ、決して忘れることの出来ないものである。

四、五回の主な作戦参加と無事生還後の感想を長く、まとまりなく、記憶のまま、感ずるまま走り書きしました。

三度召されし 我なれど

昭和終わるも 痛みは消えず

### 【解 説】

第六十九師団は昭和十七年四月、独立混成第十六旅団（独歩第八十二〜第八十六大隊―弘前師団管区）を基幹とし、山西省の臨汾（省南部运城北方）で編成された。師団編成に際しては、弘前より歩兵第六十旅団司令部、独歩第百八〜百二十大隊および師団通信隊・工兵隊・輜重隊・野戦病院・病馬廠が編入された。

初代師団長陸軍中将井上真衛、二代三浦忠次郎。

独立歩兵第二百大隊は昭和十七年四月十四日、山形市において編成完結、初代大隊長陸軍大佐山下良眼、五月二十一日山西省臨汾に最終梯団が到着し、同地付近の警備に任ず。

七月十日～二十日、山西省孝義県付近、封晋汾陽南東方地区作戦、二代大隊長陸軍大佐早川鉄二、三代陸軍中佐石井富太郎。

昭和十八年四月五日～五月二十六日、大行山脈一帯の十八春大行作戦参加。七月一日～三十一日、山西省陵川県付近の十八夏大行作戦参加。四代大隊長陸軍中佐柏木求馬。九月二十二日～十一月二十日、山西省大岳地区一帯、十八秋大岳地区作戦参加。

昭和十九年二月、大隊は臨汾地区警備を独歩第二百一大隊に移譲。新たに第三十七師団（大陸打通作戦参加のため）より山西省王茅鎮付近の黄河河防警備を継承。二十二日より移駐開始、三月十日一切完了。

四月九日～十三日、山西省稷王山周辺地区肅正作戦参加。四月二十五日～五月五日、西北河南作戦参加。作戦終了と共に大隊は河南省河南村班村付近に進駐、

同地に橋頭堡構築し確保ならびに守備に任ず。五代大隊長陸軍中佐間野俊夫。八月二十五日、西北河南作戦における武功抜群にて、第一軍司令官より感状を授与される。九月十五日～十月二日、汾南地区山西軍撃滅作戦参加。

昭和二十年三月、六代大隊長陸軍大尉岡本一雄。三十一日、南村地区橋頭堡の守備を独警第二十八大隊に移譲し、第十三軍隷下に入るため中支へ転進。四月二十日、江蘇省宝山県着。陣地構築守備に任ず。八月十八日復員下令。昭和二十一年二月二十一日、九八六名内地帰還のため上海港出帆。佐世保上陸後、二十七日故郷橋岡に帰る。

## 勝兵団・我が戦陣の記

山形県 須藤 幸一

私は昭和十五年十二月三日、現役兵として盛岡に集合入隊し、北支で最初の現地教育を受けた初年兵であ